42　『杉山流三部書』の成立経過について

大浦　宏勝，市川　友理
北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部

【緒言】

杉山和一著『杉山流三部書』は，江戸期を通じて日本鍼灸の一大流派であった杉山流の代表的流儀書であり，「鍼治学問所」のテキストとして盲人鍼医の育成のため暗誦させられた書物である．『療治之大概』『選鍼三要集』『医学節用集』の三書よりなるが，その成立に関してはいろいろと謎が多く，未だ確定的な報告はなされていない．また内容も三書三様の特徴があり，文体も三種三様に異なる．それらをどう位置づけるか検討した．

【方法および調査結果】

まず第一に，三書の記述されている文体を江戸期の写本によって比較検討した．『療治之大概』は主に変体仮名で書かれ病名や経穴名などは随所に漢字で書かれている．その内容表現には中世的大和言葉が随所に残っている．後世になるに従い漢字の割合が益す．『選鍼三要集』は全文が漢文で書かれ，『素問』『霊枢』『難経』の三経の要語を集めたことから『三要集』と名づけられたが，全体の3分の2は張介賓編の『類経』および『類経図翼』からの引用より構成されている．『医学節用集』は漢字と変体仮名まじり文で書かれ，比較的平易な口語体であり，和一の講義録といってもよい内容である．

第二に，『選鍼三要集』の和一の自序と跋，および元禄～宝永年間に書かれたと思われる記録に基づき，『三部書』の成立過程を推定した．和一は師の入江豊明より主に『素問』『霊枢』を宗とした鍼術の講義を受けている．その上で，自らは『難経』を研究し，さらに要穴に関しては『類経』から多くの示唆を受けている．『選鍼三要集』は，①鍼術の重要問題に関し，『素問』『霊枢』からの引用文，入江先生の口述内容，和一と同輩および他流の者との間での問答形式を通じて，自流としての答えを明らかにしてゆくこと，②『類経』を研究した上で，経絡経穴の流注および穴の位置を正確に記載し，腹部諸穴と手足の要穴との関係および用い方を明確にすることを主たる目的に，和一が自論を吐露した書である．

宝永6年（1709）に書かれた『杉山流家譜』の系図には，和一の師的伝授者として入江流の流れを受けた「山瀬琢一」の名がある一方，別系統として「砭寿軒圭菴」の名が記されている．実は，『療治之大概』の元となったと思われるものに砭寿軒圭庵編『鍼灸大和文』という書がある．この書は全文が変体仮名で書かれており，内容は『療治之大概』とほぼ同一である．また，元禄6年（1693）に書かれた島浦和田一編『杉山真伝流』中之巻序には，「先に杉氏書を作る．名づけて『三要集』と曰う．……『大概書』の如きは初心の為に著す者なり．然るに其の拠るところは即ち古人に出づ」とある．この「古人」とは砭寿軒圭庵であると解釈できる．さらに，同じく目録巻には「杉山先生の集むる所は，『大概書』と『三要集』なり．『節用集』は，是れ後人の集むる所の書，然れども，杉山先生集むるの由，而して伝わる也．然らば，捨つべきには非ざる書にて，貴文は誤らず」と記載されている．この島浦の言う「後人」とは，2代目総検校となった三島安一であると解釈できる．

第三に，三つの書が引用する文献がいつごろ渡来し和刻されたかに基づき，三書の書かれた時期を推定した．『療治之大概』に主たる影響を与えた『鍼灸聚英』は寛永17年（1640）に和刻され，『選鍼三要集』に主たる影響を与えた『類経図翼』は寛文年間（1661～73）に和刻されている．『医学節用集』に引用される『赤水玄珠』と『医経溯洄集』は明暦3年（1657）に和刻されている．

【まとめ】

『杉山流三部書』は，まず『療治之大概』が砭寿軒圭庵編『鍼灸大和文』を元に作られ，続いて『選鍼三要集』が和一の自著として作られ，天和2年（1682）に「鍼治学問所」が設けられた当初は，この二書がテキストとして使用された．『医学節用集』は，内容は和一生前の講義録であるが，元禄7年（1694）の和一死後，2代目総検校三島安一が編集したものである．